

原爆記

原爆投下中心から500m以内にあった

城山国民学校で昭和20年被爆。

奇跡的に生きて70数年。

何かの？見えない天の力で生かされている

被爆の記録

1929年9月9日生

小川久子

残り少なくなった人生

この体験は戦争を、核の悲惨さ、恐ろしさを知らない

世代の人々に是非伝えなければならないと思い

長い間、頭の片隅に追いやって、忘れようと努めた記憶を

呼び戻し、ここに書き留めた。

毎年、8月9日が近付いて来ると体調が悪くなる。

忘れてしまいたい。忘れよう。でも、どうしても忘れられない。

私しか知らない事実は、どうしても残しておかなければと

思い直して、やっと湧き出して来た記憶を書き留めた。

そのため、一つ一つの古い記憶は年月が前後している所もあるかと思う。

原爆投下 昭和20年8月9日 11時2分。

私は長崎県立高等女学校の3年生の時、学徒動員の報国隊の一員として三菱兵器製作所、茂里町工場に勤務する事になった。事務所は工場地帯にあり、爆撃の目標となり、危険なので、住宅地にある城山国民学校（城山町33-1）の校舎の一部を借りて移転した。三菱兵器製作所分工場事務室である。

城山国民学校は爆心から500m以内の位置にあった。

A.B.C.C. (ATOMIC. BOMB. CASUALTY. COMMISSION) の調査では、私の席は廊下側で490mだった。

8月9日快晴 何時もと変わらず仕事をしていた。空襲警報が発令されたが、何事もなく解除になった。でも、その直後、各教室に備えてあったラジオが、米空軍、B29、2機が島原半島上空を西進中と告げた。やっぱり来るのかと思った瞬間、11時2分、パッと目が眩むような強烈な閃光と同時に背面から猛裂な衝撃を受け、体が打ちのめされた。瞬間、練習どおり、目と耳をおさえていたが、上から何かおおいかぶさり、机の下？に押し込められているようだった。あたりは建物の壁、机、椅子の破壊された粉塵で何も見えない。一瞬シーンとした不気味な静けさだった。

私はすぐ近くに大型爆弾が落とされたと思ったので、「助けてー！」と大声で2～3度叫んだが、何の反応もなく、あたりはどのような状況なのか、よく見えない。ここにいて

も助けは来ないのではないかと思って身の廻りの瓦礫をはらいのけたら何とか立ち上がる事が出来た。隣の同級生と手がふれあったのでお互いに引っ張って立ち上がった。少しずつ視界が開けてきたので廊下へ出て、いつも利用していた階段まで行ったが、階段は3階から階下まで抜け落ちて筒抜けだった。階段らしき物は何も残っていなかった。(平成9年、当時の写真を見たが、鉄筋は引きちぎられ、折れ曲がっていた。あまり簡単に落ちていたので、校舎とは別で木造だったかと思ったが、やはり同じ鉄筋コンクリートだったと知って、そのすさまじい破壊力を改めて実感し、身のふるえる思いだった)

急いで引き返し、その時教室から出て来られた事務職女性2人と通常は通行禁止となっていた西側の小学校が使用していた校舎への渡り廊下を4人一緒にかけぬけた。あとで聞いたが、下は小使い室になっていて、お昼の茶の湯を釜でわかしていた。その火が天井に燃え移り焼け落ちて、私達の他に渡れた人はいなかったそうだ。

階下に降りて校舎の出口で外を見て愕然とした。外は誰が誰だかわからない程、火傷をした人、衣服もボロボロ、血だらけに変わり果てた人。生きているのかわからない人達がゴロゴロと横たわっている。4人は言葉もなく入口の階段に座り込んでしまった。私は廊下側の席だったが窓に近い人は、鉄の窓枠、ガラスも一緒に吹き飛ばされ外の地面に落ちてしまったのではないかと？

気が付くと私の右手、人差し指、中指の根本がパツクリと口を開け骨が見えている。血がしたたり落ちている。ひどい怪我をしたと思った時、三編みにして胸まであった髪の毛

が爆風にあおられ、結んでいた毛先が耳の所までしかなく、その先から生温かいものがスタスタと膝に落ちる。血だった。頭も怪我している。腰も異常を感じたのでさわったら、モンペは裂けて、手を入れたらヒフもはじけた感じだった。けれど不思議に頭も手、腰も全く痛みを感じなかった。その時初めて血生臭さを体験した。

目を遠くに移すと、あの緑豊かな美しかった城山の住宅街が木端微塵に砕け去り瓦礫の山となり、あちこちから火の手が上っている。このまま、ここに居ては火に巻かれてしまう。どこかに逃げなくてはと、4人であたりに転がっている人々をまたいで歩き出した。どこへと行く当てはなかった。途中、全身はだかで黒こげに火傷をした男の子が「一緒に連れて行ってよー！」とよろよろとついてきたが、手を取ってあげる余裕はなかった。その子はいつの間にか姿が見えなくなってしまった。かわいそうな事をしてしまった。又爆風でずたずたに破れた衣服をまとった若いお母さんが、首がちぎれかけて後にぶらさがり既に息絶えた赤ちゃんをしっかりと抱きしめて、ふらふらと物かげから立ち上がり、ついて来られたが、その後、どうされたか、姿は見えなくなってしまった。

辺りはむごい事ばかり、目にした光景は忘れないが、書けない。山端康介の写真集「長崎ジャーニー」が物語っている。

三菱兵器製作所の大橋工場へ行けば本部の人たちと会えるかもしれない。火を避けて護国神社へ登った。社殿はくずれてあとかたも残っていない。人の気配は全くない。この先までは被害は及んでいないと思い、ここを越えれば何とかなると思ったが、その先も既に

焼跡と瓦礫ばかり。通り過ぎて市立商業学校のグランドへ降りた。途中、鎮西中学校の5年生の生徒さんに出会った。生徒さんはお友達を背負っておられたが、そのお友達はお腹が裂けて腸が出ていた。生徒さんは「もう友達はとても助からない。少しでも生きる望みのある人を連れて行こう」と親切に私をおぶってくださった。

しばらく暑い廃墟の中を歩き、漸く森の中に入り、涼しい水の流れがみつかった。暑さもやわらぎ、皆疲れた体を休ませた。私はここちよく眠くなりウトウトした時、「かわいそうだけど、もう助からないだろうから置いていこう」と言っている声が聞こえた。私の事らしい。驚いて手にふれた足にカー杯しがみついて「置いていかないで、連れて行ってー!!」と叫んだ。

山をおりて森を出なくてとはと、又皆で移動をはじめた。その時、どこからか朝鮮の若者が現れて合流し、疲れた生徒さんに代り私を背負ってくださった。なんと大きく広く力強い背中かと安心してしっかりとつかまっていた。

川の側に出た。どこの川かわからない。浦上川だったのか？川の中には火傷をして黒こげの人、大怪我をした人で一杯だった。まともな姿の人は一人もない。皆無表情で呆然と水の中にすわっている人、横たわっている人々。

あちこちから消息を尋ねる叫び声が聞える。「大橋工場給与課の課長はおられませんか？」と叫ぶ声が聞えた。課長も行方不明かと益々心細くなった。課長を頼って行こうと思っただのに、大橋工場も破壊されてしまった。

どこをどう歩き、どこからの情報だったかは、今となっては定かな記憶はないが大橋のガスタンク横の広場で待てば、救護列車が出るとの事で大橋へ向かった。着いた時はうす暗くなり雨まで降ってきた。大橋へ着いたあと、あの朝鮮の親切な若者はどこへ行かれたのか、姿は見えなくなった。お礼も言えなかった。

ずいぶん待ってやっと来た列車は、動けない重傷の人達と簡単な消毒の手当の人しか乗れず、諫早か、大村までしか行かない。女性事務職の一人はその列車に乗り、諫早で降りて、迂回道路を通過して長崎へ行くトラックに乗って帰られたそうだ。その後、私の消息を書き「小川久子さんの消息が書いてあります。目に留った人は造船所に届けてください」と書き、新大工町の電信柱にくくりつけてくださった。それが父の元へ届けられた。

次の列車は道ノ尾駅からしか出ないと聞いたので暗闇の中を鉄道の大橋の鉄橋の枕木の上を歩いた。私達3人と、もう一団戸板に怪我人をのせた男性4～5人が渡った。

道ノ尾駅に着いた時は、少し明るくなって来た。漸く救護列車に乗ったが、大村では重傷患者だけが降ろされた。軽傷者はそのまま乗っていた。竹松も、止まる駅はすべて怪我人で一杯、だんだん遠くへ運ばれ、やっと降りたのは早岐駅だった。救護所は早岐国民学校、駅で道を教えていただき歩いた。ジャリ道は歩くのも大変だった。こんな遠くの早岐に来てしまって、父母は知らないだろうから、もう会えないでここで死ぬのかと…！

やっとたどりついたが、そこはもう既に怪我人で一杯。私のように歩ける者は治療も待たされ、頭にささった2cm角位のガラスをペンチのような器具で力づくで抜き取り、消毒

して、リバノールガーゼをのせただけ。手や足、服の中の傷は見ていただけなかった。教室へ行ったがもう一杯、少しのすき間にやっと寝た。

廻りを見ると、背中一面、ガラス片、木片、竹のササラのようなものが無数に刺さっている人、身体全体、何もまとしてなく、頭も体も手足も黒焦げの火傷でパンパンにはれあがり、目も鼻も口もわからないような人、まるでゴム手袋をひっくり返したように肘のあたりから手の皮が赤むけになり爪の先だけでくっついてぶらぶらとぶらさげたまま歩いている人、これが地獄かと思うありさまだった。私などは極、軽傷だと思った。

同級生は一人っ子で、こんな悪環境の所はとても堪えられないとその日の夕方、早岐発のトラックで帰ってしまわれた。とうとう私一人になってしまった。

教室、廊下、三和土は足の踏み場のない程の怪我人が寝ておられた。生きているのか、死んでしまわれたのかわからないような、衣服もまとしていないような人達が空襲警報のサイレンが鳴ると、ガバツと起きあがって防空壕へ急いでいかれる。私にはもうそんな力が残っていなかった。だまってその人達を見ていた。防空壕へ行ったきり、戻って来ない人も何人かおられた。隣にねている人のおなかの大きな傷口からはウジが盛り上がり、こぼれるようにボロボロと出てきて、あたりを這いまわる。枕元の人は苦しそうになつておられたが、とうとう動かなくなってしまう。

「小川さん！小川さんではないか？私の顔を覚えているか？」と声をかけてくださった方がおられた。長崎の附属国民学校の頃の先生だった。こんな遠く離れた所に来て先生に

お目にかかれるなんてと、涙が溢れた。しばらくして、小さな赤ちゃん用の敷布団を持って来てくださった。お布団はとても柔らかかった。早岐まで運ばれて、こんなに遠くまで来てしまっただけで、もう父母に会えず死ぬのかと思っていたので、先生にお会い出来たのは幸運だった。早岐でよかった。偶然とはいえ、先生にお会い出来たのだから!! すぐに早岐警察署に連絡。早岐警察署から、長崎警察署へ連絡してくださり、そして父に知らせてくださった。

8月12日? だったと思う。日時は全く解らなくなっていた。父の知人が若い男性2人と迎えに来てくださった。担架にのせられ、学校を後にして、漸く我が家へ向かった。担架にのって運ばれる幸運に恵まれたのに、ゆさゆさとゆれる度毎に弱った体にはなんと苦しい事であったか。

早岐駅から列車に乗り長崎へ向った。諫早を過ぎ長与のトンネルを出た所で米軍機の機銃掃射を浴びた。列車のすぐ横をピュッ、ピュッ、ピュッと音を立てて銃弾が何発も飛んできた。急いで座席の下へおりて、若い男性が覆いかぶさってくださった。列車は再びトンネルの中へ引き返し、暫くなりひそめていた。再び動き出しトンネルを出た。窓の外は一面の焼野原。曲りくねった電柱に倒れかかったまま死んでいる牛、地面に転がり丸くふくれあがった馬、恐しい光景が広がっていた。

列車は未だ道ノ尾までしか開通していない。私の今の体力では道ノ尾から長崎南山手の自宅まではとても移動は無理なので、道ノ尾の父の知人のお宅へお願いしてお世話になっ

た。やっと畳の上の柔いお布団に安心して寝ることが出来た。幸いとなり？の道ノ尾神社に長崎大学医学部、外科部長の調教授が婦長とお二人で救護所を開いておられた。お願いして教授に往診していただき、傷の手当、耳にささっていたガラス片を抜き取り、膿を押し出してくださった。膿と共にガラス片がいくつも出て来た。痛みは少しずつすらいできた。体のあちこちの傷を見ていただき治療もしていただけた。又長時間傷口が汚れたままになっていたので、破傷風を発症するおそれがあると、血精の注射をしてくださった。その後も往診していただいた。とてもありがたい事だった。

ここ道ノ尾で天皇陛下の終戦のお言葉をトギレトギレのラジオの放送で聞いた。日本は負けたのだ。この後はどうなるのだろう。不安が広がる。家主の小父様がいざと言う時のためにと日本刀を出して来られて、私の部屋にも一振り置いていかれた。アメリカ軍につかまり連れていかれるより、自刃するようにと用意してくださった。父もその覚悟だったので、驚きはなかった。

ここで食事らしい食事をいただけたので少しずつ体力も快復して来た。父も数回、会いに来てはげましてくださった。早く父、母の元へ帰らなければと歩く練習を始めた。足は細くガクガクになってしまったので、先ず起きて座る事、次に立つ事、腰も抜けてグラグラだった。1歩2歩と踏み出すのも大変だった。2歩、3歩そしてつかまらないで4歩、5歩と歩いた。次は靴をはいてお庭に立つ。これも思ったより大変だった。日常の事が出

来なくなっているのは情けない。でも帰らなくては！帰りたい一心で表のお庭まで近い所だが懸命に歩いた。

帰える日がやっと来た。長崎駅まで鉄道が開通したのだ。8月29日だったと思う。道ノ尾を後にした。車窓から見える景色はここも焼野原。三菱製鋼所、三菱兵器製作所茂里町工場、三菱造船所幸町工場の工場群は皆押しつぶされ、原形をとどめない程、めちゃくちゃに押しつぶされ破壊されてしまった。馬がガクンとひざをついたまま、白骨になっていたのを思い出す。忘れられない光景が広がっていた。

長崎駅からは、すぐ隣の水産場の栈橋から舟に乗り、松ヶ枝の炭坑社の栈橋に上陸、背負われてやっと南山手の自宅にたどりついた。和室にゆっくり落ち付く事が出来た。ここもベランダのガラス戸は原爆の爆風で全部割れてしまったそうだ。

待機しておられた医師の診察を受け、傷の手当、血液検査を受けた。白血球の数値が非常に少くなっており、輸血の必要がある。なるべく早い方が良いと、9月4日、一回目の輸血。血液が注入され始めた直後、激しい悪寒。父がカー杯おさえてくださったが、止まらない程の震えと寒さに苦しめられた。その後2回輸血を行ったが、度毎に激しい悪寒になやまされた。

その後、少しずつ快傷し気持にも余裕が出来たので、被爆後、よごれた髪もそのまま、櫛を入れるなどとても出来なかったもので、少しほどいてときたくなった。三つ編にして胸

まで長かった髪が爆風にあおられて逆げ立ち耳のあたりまでふくれて短かくクシャクシャになり、血液が血糊となってドス黒くかたまり、こびりついていて。母に櫛と新聞紙と屑籠を持って来てもらった。新聞紙を広げ手先から少しずつ櫛けずった。血の固まり、ガラス片、木片、瓦礫の土くれなどがザラザラと出て来た。髪の毛もドンドン抜ける。1ヶ月近くも髪をといてなかったのも、たまっていた抜け毛が出て来たと思い屑籠に入れた。すぐ一杯になってしまった。

その時、私の様子を見に来た母の顔が急にこわばり、櫛をもぎ取り一杯になった屑籠を持って何も言わず足早に出て行ってしまった。何事が起きたのかわからなかった。丸坊主になっていたのだ。お手洗に行って鏡を見てしまった。誰が写っているの！なんと情けない姿になった私だった。愕然とした。暫くは何も考えられなかった。こんな姿になってしまっはとても復学して通学したり、外へ出る事も出来ない。少し快復して歩けるようになったら、どこか誰も知らない遠くの尼寺へ行こうと思った。涙が溢れて止まらなかった。でも大叔母や父、母には見せられない涙。もうこれからは絶対に泣くまいと覚悟した。

その頃から口の中、喉の奥まで白い大きな水泡が出来て、水をのむ事も唾液をのみ込む事、勿論、食物を食べる事も出来ず、言葉を話す事も思うように出来なくなっていった。柿の葉を煎じて飲むと良いとか、乾燥して粉末にしたレバーを溶いたスープが良く効くとか皆さん心配して、色々持って来てくださったり、教えてくださり、母もそれを工夫した

お料理を作ってくれさせたが、唯でさえ、口は痛いし、食欲もないので、おいしくいただけるものではなかった。左腰の傷は長い時間、手当をしなかったため、ガーゼを取り換える度に化膿した傷口から膿と一緒にいつまでも小さなガラス片が出てくる。毎日手当をしてもらった母の気持を思うと・・・！！仰けに寝ると傷が痛いので身体をひねって寝ていたため、右腰骨あたりが常に体重がかかり圧迫されてだんだん感覚がなくなり褥瘡になってしまった。母が皮膚が紫色になってしまったと、心配していた。

この家も立ち退きを命じられた。進駐軍の宿舎にするので早急に明け渡すようにとの事だった。家族は弟や妹が未だ幼く、少しでも静かで食糧に困らない所が良いと、南高来郡^{コウジロ}神代村（現、国見町神代）^{クウジ}小路の鍋島邸、別邸を拝借して移り住む事になった。私は未だ治療があるので大叔母と長崎市馬町の借家の二階を借りて残った。父も仕事の関係で一月の中半月位はこちらに来ていた。

その頃、私は家族と同じ食物を食べているのに、私だけが激しい嘔吐、下痢、全身の蕁麻疹などに悩まされた。又、顔の右半分が麻痺して動かなくなり長く続いた。

毎晩、眠りにつきウトウトしはじめると、急に枕元に暗い大きな穴がポツカリと口を開け、頭から逆さまに穴に吸い込まれる。こわくて悲鳴をあげる。父は傍に座ってしっかり手を握りしめてくれた。幾晩も続いたので夜が来るのがとてもこわかった。

又悪夢を見る。私はどこかの海の渚に立っていた。沖の方を筏が通っている。筏には沢山の怪我をした人、火傷をした人が乗っていた。そしてその中には学校のお友達も乗っている。渚に立っている私をみつけて「久子ちゃん、久子ちゃん、早くおいでよ。早く来ないと乗りおくれるよー」と皆で手まねきをしている。私は沖の筏に向って懸命に歩こうとするが、なぜかどうしても足が動かない。とうとう筏は通り過ぎて行ってしまった。乗る事は出来なかった。もしあの時、筏にたどりついて乗っていたら、亡き人の仲間になっていたのかも知れない。

昭和 20 年 10 月中旬頃だったと思う。アメリカ進駐軍の調査と日本の合同の調査が新興善小学校で行われた。私にも出頭するように要請が来た。二日間に亘り、当時の城山国民学校の様子を詳細に尋ねられた。私がある時（被爆した）の教室の机、その他の配置、そこに居た人の名前や席の位置など図を書いて詳しく聞かれた。その時、あの教室の生存者は私一人だけだと初めて聞いた。驚いた。私が教室のどの位置にどんな姿勢でどちらを向いて何をしていたかと尋ねられた。その調査で城山国民学校の 3 階の端の教室はペシャンコにつぶれてしまったと聞かされた。幼稚園からずっと一緒だった林嘉代子さんは 3 階で亡くなられた。（米軍撮影 米国国立公文書館所蔵、長崎被爆荒野 106 頁）

昭和 20 年 12 月末、やっと神代の母の元へ一時期帰れる事になった。家族皆一緒に新年を迎えられるようになった。久し振りに母の手料理をいただいた。とてもおいしかった。賑かで楽しかった。又近くの農家の方々が私が元気になって帰って来たと、みかん、野

菜、牛乳、卵などなど、食べるもの、どれもおいしかった幸せだった。でも食料難はここでも厳しく、お米は母の和服と物々交換でやっと手に入れる事が出来た。朝食はおいもの方が多いもがゆ、昼食はふかしいも、おやつはいもしるこ、勿論、砂糖やだんごは入っていない。夕食はこれもおいもの方が多いも御飯、野菜は父が近所の農家から少しの畠を借りて種を買って、袋の説明を読んで作っていた。

丁度その頃、頭をさわると何かチクチクと指先にふれる。母に見てもらったら髪の毛が生えてきているようだ。家族みんなでもとても喜んでくれた。これでもう尼寺へは行かなくてよい。皆と一緒に居られると、本当に嬉しく安心した。

お風呂に入り左足のスネをこするとチクツとして血が出た。翌日も翌々日も同じ事がおきる。指先で押えると固いものがあり痛い。ガラス片が入っているようだ。村の外科医の^{ボリ}母里先生に診察していただいたら、確かにガラス片が入っている。人間の身体は異物を体外に押し出す作用をする事がある。ほっておくと傷口が化膿する恐れがあるとの御説明で摘出する事になった。十文字に切開してガラス片を取り出してくださった。先生が「被爆者の体内から今頃になって出て来たガラスは滅多に目にする事はない。珍しいから記念に欲しい」と言われたので差し上げた。又数年後、右の頬からも同じような状態でガラス片が出て来たので摘出した。

翌年 2 月頃から頭、顔、手足等全身に 8 mm 位の水泡が出来て、だんだん中が化膿してズキズキと痛んだ。背中一面にも出来ているので、寝ると痛く安眠出来ない。薬もないので苦しんだ。そのうち水泡はカサカサになり皮がはげてやっと治った。

その後もひどい口内炎でしばしば食事が思うように食べられなかったり倦怠感がひどく起きていられなかったり、血液検査の度毎に白血球の数値が減少し治療を受けていた。

昭和 28 年、結婚の話があった。被爆者でありながら結婚し、子供を産んでもよいのかと、主治医にご相談した。当時は被爆の影響が一生続くとは、誰も思っていなかったのので、主治医も勇気を持って望みなさいと、励ましのお返事をいただいた。やっと決心した。

だが、二人共早産だった。小さく生れてすぐには会えなかった。常に観察出来るようにと婦長室に寝せられていた。母乳は自力では吸えないので一時間おきに看護婦がしぼりに来られ器に少ししぼって、脱脂綿を細く切り丸めて、母乳を含ませ、口の中へ少しずつしぼり込む。飲んでくれたかと思うと半分位は口の端から流れ出たそうだ。

やはり私の被爆の影響でこんなに小さく生まれたのか、子供達は何も知らずに生れてきて、かわいそうな事を、無責任な事をしてしまった。健康に育て欲しいと思い、生れる前から名前には健と康の字を用いる事にしていた。二人の子供を授かり、健（タケシ）と康子（ヤスコ）と命名した。そして、子供達が一人立ち出来るまでは、自分の健康も今まで以上に大切にしなければと思った。

だが、その願いは続かなかった。昭和 34 年、アパートの我が家の横の空き地に市の保健所の検診車が巡回して来た。子供達を庭で遊ばせて、念のためと思って受診した。結果はまさかの肺結核の発見だった。早期発見だから良かった。主治医の治療を受けた。1 年間、ストレプトマイシンとパスの治療だった。子供達と思うようには遊んであげられなくて淋しい思いをさせてしまった。

昭和 36 年頃から月に 1、2 回激しい頭痛に襲われた。時計の小さなコチコチと秒を刻む音が頭につきささるように痛い。僅かな光でも目を開いていられない痛みを感じる。頭は疲れ果てて眠りたいのに眠れない。戸を閉め切った真暗な部屋でじっとこらえていた。2、3 時間位すると少し楽になって来て短時間だけど眠れた。長い間苦しんだ。

又急に目まいがして後にドスンと倒れる事が時々おこった。外の影色が廻るのではなく後頭部の首に近い所が内部を突然かきまぜられるような表現しにくい目まいだった。外出している時も、前兆のような感じがすると、又急に倒れるのではないかと急いで帰宅し、常に恐れていた。

昭和 38 年頃からか定かではないが、突然激しい目まいと嘔吐で倒れ、主治医に往診してもらい点滴をしてもらっていた。2、3 ヶ月に 1 回はおこる。これもこわくて長時間の外出は望めなかった。

昭和 45 年、甲状腺の手術をした。放射能は甲状腺に影響を及ぼす。鏡を見ると首の右側がふくらんでいる所がある。触ってみると確かなしこりが指に感じる。診察していただいたら、甲状腺の横に脂肪腫と思われるものが 5 個程出来ている。今は悪性ではないが、悪性の腫瘍に変化する事がある。今のうちに摘出した方が良いとの事だった。9 月 19 日入院、大きい 3 個は摘出したが、あとの小さい数個は結索した。12 日間の入院だった。予後は順調に快復したとは言え、起き上がる時首が痛いので自分の手で持ちあげて起きなければならないし、首を廻すのが暫くの間は痛かったので不自由だった。体を廻さなければ右には向けない。今もその時程ではないが右には余り廻らない。

昭和 48 年 8 月、腹部左側にしこりがあるのに気が付いた。婦人科での診察で子宮にこぶし大の筋腫が出来ていた。出血がひどく貧血がひどかったので摘出した。おなかに力を入れて重い物を持つと縫目がはじけるのではないかと、こわくて持てなかった。

又、ガンもこわいので乳ガンの検査は自分でもしこりがないか気を付けていた。

平成 3 年 9 月、小豆粒位の固いしこりが右乳房外側にあるのに気が付いた。乳腺の炎症の固さとは少し違って小さいのにクリッと固く、押しても痛さは感じない。当時広島に住んでいて、広島でも放影研の検診があり、丁度その時期だったので担当の医師に相談した。その医師は専門ではないので、次週、広島大学の江崎先生の診察があると、予約を取って紹介していただいた。内分泌の専門の先生だった。江崎先生の診断で確かにガンの恐れがある。早くマンモグラフィーの検査を受けるようにと放射線科病院を紹介してください

り予約をしてすぐに行くように言われた。検査の結果はやはり乳ガンだった。乳房温存法の手術を受けた。温存法はガンがまだ小さく乳首より外側でないと出来ない方法だった。幸いまだ小さく外側だった。少しでもガン細胞が残っていると再発の恐れがあるので放射線照射をしなければならない。キズが直ったら照射をする事になり2月から週5日、月曜から金曜まで7週間、次に極部分だけに強力な放射線を5回の治療を受けた。その後3年位は右側の首、右腕、脇腹の筋肉がつっぱって毎日の生活への影響は大きく何をするにも不便だった。

平成16年4月7日、珍しく主治医から電話があり、先日の胸部レントゲンの検査の結果、昭和35年の肺結核のキズあとではないものが同じような所に写っている。肺ガンの疑いがある。大村国立病院の呼吸器専門の医師の診察を受けるように予約を取り、紹介状を書いたから、4月9日に行くようにと言われた。

肺ガンと知らされてショックは大きかった。乳ガンと違って肺と言う大切な臓器だ、だが原子爆弾が投下された瞬間、長崎が壊滅しすべてが死んでしまったような悲しいショックに比べたら、私一人の事、まわりには充実した病院、設備、医学がありすぐれた沢山の医師がおられる。主治医も家族も見守ってくれている。又立ち向かっていこうと思った。だがやはりもしもの事を考えて身の整理だけはした。

呼吸科の診断の結果、しばらく様子を見て、患部に異常がおこったらすぐに手術をする事に決った。2週間に一度通院する度に待合室で待っているとお腹がグチグチと痛くなり下痢をする。弱虫だと思うが自分ではどうする事も出来ない。情けない。

丁度一年経った頃、ガンが進行し始めた。治療をはじめる事になった。方法は、手術と定位放射線の治療がある。手術の方法は外科に聞いくださいと電話連絡して下さったので外科に行った。考えただけでも気が遠くなりそうに怖い。私は身体にもうメスを入れたくないので後者を選んだ。定位放射線治療は県立島原病院でしか、行っていない。私はその方法には何の知識もなかったので、島原病院の担当の医師の説明を伺うために、平成17年2月、島原病院へ行った。とてもご親切にわかり安く説明して下さった。生存率を伺ったら、未だこの方法の治療を行っている所は京都大学と島原病院が協同で始めて2年、治療を受けた患者も100名弱で参考にはならないと言われた。ただし、この治療は確実にガンと判明しないと、他の病気だと悪化する恐れがある。PET.C.Tの検査でガンと確定したら治療は可能だと言われた。しかし、当時、長崎県内にはまだPET.C.Tの検査を行っている所はなく、久留米まで行かなければならない。手術をしなくて済む方法があれば久留米でもどこでも少し位遠くても行く事にした。久留米の検査でガンと確定した。

島原病院で治療を受ける事にした。平成17年4月に入院。放射線治療は毎日午前10時、火曜日から金曜日まで4回一週間で終了した。退院時のご注意で、放射線治療のあと、肺炎を必ず発病する。ガンの廻りが微量ではあるが放射線で傷つく事はさけられな

い。微熱が出たら、時間外であってもただちに電話して、診察を受けるよう来院するようにと言われた。8月予期していた肺炎が発病した。ステロイドの服用の治療を受けた。その後、ずっと定期検診を受けていた。決して順調に快復したとは言えないが、徐々に健康を取り戻した。平成26年2月の検診の結果。「肺ガンは寛解しました。もう通院の必要はありません」と告げられた。ホッとした。嬉しかった。全身の緊張感が抜けてしまった。早速家族、兄弟に知らせた。皆、喜んでくれた。長かった。ホントに長かった！！

平成18年11月14日夜、私は病名は聞いていないが倒れ救急車で国立大村病院へ入院した。水分、食事の制限があり3週間の入院だった。

又白内障の手術を受け、水晶体を抜き取り、今は両眼ともプラスチックの玉が入っている。その後も不整脈。目まい。嘔吐などしばしばおこる。不整脈は今でも季節の変わり目、低気圧の通過の時などにおこるが、特別な治療もなく我慢、我慢である。

平成30年7月14日、自宅の廊下で転び、大腿骨を骨折。17日に諫早総合病院整形外科で手術、金属の人工骨を入れ、歩けるようになった。3週後、リハビリのため貝田整形外科に転院。8月8日から10月13日まで歩行訓練、おとろえた筋力をきたえ直し、10月13日退院した。

左足は体と直角以上は前に倒せず外へ広げる事はして良いが内側へは脱臼するので禁止。戸棚、押入、等使用するものは、皆、下の物を上へあげたので、いささか不便を感じる。

被爆して 60 年、70 年と過ぎ少しずつ客観的に体験を見つめ、話せるようになった。

そして被爆後は絶対に近寄りたくない、行きたくないと避けていた城山国民学校に一度は行って現状を見たいと思った。

私達が使用していた建物は残っていなかった。

今、息子、娘、二人共還暦を過ぎ、^{こんにち}今日まで大きな病気もせず健康に暮らしている。私にとっては、この上ない喜び幸せ、安心。

そして一番嬉しい親孝行をしてきている。

ありがとう！！

2019 年 7 月 24 日 完

A.B.C.C.

ATOMIC.BOMB.CASUALTY COMMISSION

昭和 22 年 長崎、広島に開設

昭和 50 年 放射線影響研究所として日本側が受けついだ。